

鯨の墨遣ヤリといひしが始なり、

〔近世女風俗考〕髻の事

古老茶物語享保中の寫本寛政頭書に、鬢張ハシといふ物は、明和の始頃よりはやり出て、寛政の頃にすたれり、又寛政の始頃より、針線を丸くゆがめ髻へ入る、天明の頃の髻は帯をたゝみて置しやうになりたり、

〔近世女風俗考〕髻の事

安永の末か、天明の始か髻入ハシといふ物はやれり、其製は、厚き紙にて、如此造り、髪を上下分ち、其なからに入て結び又は是に綿をいれて結へるとかやかくいへるは、予(生川春明)慈母在世出ふる、髪入れば、まのあたり見ざること故、違ひもあるべし、中略針線を丸くゆがめてと段今専用ふる、髪入の事也、是も古製は、今のさまとは異にて、三階或は五階七階など、針線にて段今専造りしと

髻止

〔守貞漫稿十女扮〕今世嘉永京坂式正所用鼈甲製

髻止ワケドメト訓ス〇圖略 曲止ハ從來江戸ニテ、無用之具也、

同京坂所用

髻止〇圖 穀餅形ト云、中年以上ノ婦、此髻止ヲ用フ、此形ノ耳搔ヲ撥耳ト云、

小枕

〔嬉遊笑覽容一下〕鬢さしは、安永八年はやり出て、此頃すたれ、小枕ハは町方にて、文化の初ころよりすたれて用ひざれども、今は髪少なき者多く、小枕付の入髪をば用るなり、小枕もはじめは、付木などを輪にして用ひたり、寶曆明和のころなり、

〔倭名類聚抄十四容飾具〕髻音活、孫愔切韻云、髻音活、和名、以組束髮也、

〔類聚名義抄三〕髻音活、或モトユヒ

〔伊呂波字類抄毛〕髻音活、所モト以組束髮、

髻名稱